

平成 23 年度に SS 評価された「教育／社会貢献・学内運営」について； 筑波英検補習から Tsukuba Summer Institute まで

三木ひろみ*

The 2011 Best Faculty Member Award of Education, Social Contribution, and University Management Recognizing the Remedial English Class and Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport

MIKI Hiromi*

平成 23 年度に体育系から SS 評価教員として推薦していただき、ありがとうございます。評価していただいた教育活動は、筑波大学に赴任した年から継続していた筑波英検不合格者を対象とした英語補習授業、社会貢献・学内運営に関する活動として評価された活動は、2010 年から始めた Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport でした。

筑波英検は、筑波大学外国語センターが作成していた独自の検定試験で、筑波大学開学当初から平成 23 年度に廃止されるまで、この検定試験に合格することが卒業要件となっていました。私が筑波大学に赴任した年に、2 年生の専門語学 I を担当することになり、クラスの学生から筑波英検のための補習をしてほしいと頼まれて補習を始めました。参加希望者が増えていき、教育課程委員会の予算をいただいて、英語教育専攻の大学院生にも TA をお願いするようになり、1 年生から 4 年生まで 100 名ほどが補習に参加していた年もありました。

補習クラスは、点数の取りやすい文法問題中心に進めていましたが、参加していた学生達の英語力には幅があり、補習はいつも中学 1 年生レベルの be 動詞と一般動詞の区別から始め、試験直前には多くの学生が仮定法や分詞構文の問題まで解けるようになりました。それでも 2 年に 1 人くらいの割合で、補習に参加していた学生が不合格のために留年することがあり、本当に申し訳なかったです。試行錯誤を重ね多方面からのご協力を得て、ついに何年も続けて卒業予定者全員が合格できるようになり、そし

て、平成 23 年度にやっと筑波英検が卒業要件からはずれ、補習クラスは終了しました。

筑波英検が平成 23 年度から廃止されることが決まった頃、大学院生と体育教師のためのサマースクールを筑波大学で開いてくれないかという打診がありました。きっかけは、平成 21 年 12 月に文部科学省スポーツ・青少年局が初めて主催した国際シンポジウム「青少年スポーツ活動国際シンポジウム：青少年の豊かなスポーツライフの実現をめざして－学校体育・運動部活動・地域スポーツクラブの連携」でした。高橋健夫先生をチーフコーディネーターとして、イギリスのベドフォードシャー大学から Dr. David Kirk、アメリカのオハイオ州立大学から Dr. Jackie Goodway、オーストラリアのクイーンズランド大学から Dr. Louise McCuaig、ドイツのルードヴィッヒブルグ教育大学から Dr. Annette Hofman、シンガポールのシンガポール・スポーツスクールから Dr. Irwin Seet と Dr. Deborah Tan を招聘しました。国際シンポジウム自体の成果もありましたが、このシンポジウム以前に互いを知っていたのは、Dr. David Kirk と Dr. Louise McCuaig だけでしたので、招待講演者たちが口々に収穫だと言っていたのは、お互いと知り合え情報交換できたということでした。「これだけの国々から多方面のスピーカーを呼べるのは素晴らしい」「これから毎年集まらないか」「自分たちの夏休みを 1 週間提供してワークショップをやらないか」「日本でワークショップをすれば、アジアから日本に来るだけで、世界中の情報に触れられるじゃないか」という調子で全員が帰国する前

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

に話がどんどん進んで行きました。あまりのスピードに、Dr. Louise McCuaig は、「どんなに良い事でも、できない事を始めては駄目」と何度も忠告してくれました。Louise の言葉と、Dr. Goodway と Dr. Kirk の猛烈な後押しを受けて、阿江学群長（当時）にサマースクールについてお願いしたところ、もちろん、「そら無理やろ」とのことで、あっという間に年内決着しました。と思いきや、平成 21 年度の年度末に、学内の公募型プロジェクトである国際連携プロジェクトに申請してもよしと当の学群長から言っていたが、プロジェクト経費を 100 万円獲得することができました。

こうして第 1 回目の Tsukuba Summer Institute (TSI) を平成 22 年 7 月 24 日～31 日に開催することができました。講師として、Dr. Kirk、Dr. Goodway の他に、松元剛先生と交流を深めていたオハイオ州立大学のウェルネスプログラムのディレクター Jae Westfall 氏、Student Athlete Support Service Office ディレクター David Graham 氏、高橋健夫先生、長谷川悦示先生が交流を続けていたクイーンズランド大学からは UQ Sports スタッフの Vince Kelly 氏が参加しました。



写真 1 Tsukuba Summer Institute 2010

Dr. Kirk から、体育の授業モデルの一つである「スポーツ教育モデル」についての講義を聞き、高橋健夫先生から「スポーツ教育モデル」が日本の体育授業でどのように実践されているのかについての講義を聞く、真田久先生の、教育・文化としての武道についての講義を聞いた後、岡田弘隆先生から柔道の実技指導を受ける等、単に海外の研究者の講演を聞くというプログラムではなく、常に比較文化的視点を持ち、理論や研究を実践に結びつけることを意識したプログラムでした。また、オハイオ州立大学におけるウェルネスを中核とした「大学体育」、クイーンズランド大学における競技団体・地域のスポーツ指導者・大学院生を連携させた「大学体育」、学生競技者の競技と学業のサポートについて、現在の形になるまでの経緯や運営・財政についてもざっくばらんに尋ねることができました。全ての講義や演習

は英語で行われ、英語で話しているか通訳しているかのいずれかの英語漬けの毎日でした。教室で話し、体育館で、野生の森で、公式・非公式の懇親会で話し、期間中延々と話し続けることができるこのような機会を楽しんだのは、参加した学生達よりも、私を含めた教員・スタッフだったのではないかと思います。

海外から参加した学生は、ベドフォードシャー大学から 2 名、クイーンズランド大学から 1 名の大学院生、インドのマナブラチャナ国際大学から 2 名の学部生のみで、日本人学生は、筑波大学、日本体育大学、順天堂大学等から約 30 名の大学院生、約 20 名の学部生が参加しました。

小中高が夏休みに入ってからの開催でしたが、韓国、台湾、日本でも、夏休みを利用した現職教員の研修会や研究会が既に企画されていたため、当初 Dr. Kirk や Dr. Goodway が構想していた、夏休みを活用したアジアの現職教員を対象とするワークショップは実現しませんでした。主な参加者が、体育科教育学を専門とする大学院生だったことから、大学院生のための研究計画のワークショップを、グループワークを中心に進めていくことになりました。このプログラムは、Dr. Kirk と Dr. Goodway がその後も改良を重ねて続けている Graduate Research Seminar です。このプログラムでは、まず初めに、研究のテーマとして取り組む価値のあるホットトピックについて考えます。ただ興味があるからやってみようという理由ではなく、取り組むべきテーマかどうかを考える必要があるということが強調され、4～6 人程度のグループで取り組むべきテーマについて議論します。次に、研究手法やテーマの異なる 3 編の論文を用いて、ホットトピックに関連する先行研究の読み方と取捨選択、整理の仕方について学びます。そして、先行研究の検討を通じて中核となる考え方や理論を見つけた後、各グループで、自分たちが選んだ取り組むべきテーマに関する Research Question を設定します。次に、質的研究と量的研究について講義を受けた後、研究デザインの Alignment（先行研究→理論→研究パラダイム→Research Questions→研究方法→データ分析→予想される結果のつながり）について学びます。これ以降は繰り返しアライメントができていくかどうか繰り返し講師陣から尋ねられます。その後、現場でのデータ収集と研究倫理、データ分析、効果的な研究発表、指導教員との関係や共同研究の進め方についての講義や演習が続き、最終日に各グループによる研究計画のプレゼンテーションが行われます。この間、連日、課題・宿題が出され、各自で考えて来

たことをグループで話し合っただけで、各グループが課題について発表するという形式で進められるため、講義や演習が終わった後にグループで集まって話し合い、講義や演習が始まる前から集まって準備するという時間が日に日に増えていきます。あまりにもハードスケジュールだったため、第1回 TSI の終了直後に、今後はプログラムの中日に完全休養の日を設けることをルールとしました。第1回 TSI は、日本人学生や講師陣にとって刺激的だっただけでなく、数少なかった海外からの学生にとっても有意義なプログラムとなりました (Occhino, 2010)。

TSI 終了直後から、次年度の開催に向けての準備が始まりました。予算獲得のために9月にはもう、Dr. Kirk の勧めで、ハードルの高い日英の二国間共同プロジェクトに申請していました。日英両サイドから面倒な申請書を提出しましたが、もちろん簡単に採択されるようなものではありませんでした。Dr. Kirk から、「ここで不採択でも、1回これを書いておけば、次に他の申請機会があった時にこれを基にすればすぐできるからいいんだ」と言われ、採択が難しそうなお申請にもチャレンジする勇気が出てきました。そうしている間に見つけたのが、JASSO (日本学生支援機構) の留学生交流支援制度でした。それまで、留学生を対象とした支援制度と言えば、大学院に留学して修士や博士取得を目指す正規留学生や、国際交流協定を結んでいる大学間や学部間での3ヶ月以上1年以内の交換留学生が対象でした。それが、平成23年度から新たに、3ヶ月未満の学生派遣「ショートビジット」と学生受け入れ「ショートステイ」プログラムに参加する学生を対象とした奨学金制度が開始されたのです。加えて、この奨学金は受給者の学業成績や経済状況に基づいて決められるのではなく、受給者が参加するプログラムの内容が審査されるというものでした。プログラムの目的、到達目標、特色、学習成果の測定方法、プログラムの効果等のプログラムの詳細、プログラムに参加する交流協定校の一覧や協定内容等についても記載しなければなりませんでした。Dr. Kirk の予言通り、不採択になった申請書の残骸が役に立ちました。受け入れプログラムの申請大学数は88校、申請プログラム数は137件でしたが、新しい制度のため採択率は83.9%と高く、30名分の奨学金を得ることができました。その後、平成25年度からは「短期受入・派遣 (短期研修・研究型)」と名称が変わり、ルールの変更もありましたが、平成24年度には40名、平成25年度には80名の海外からの学生参加者にそれぞれ8万円の奨学金を支給することができ、一気

に海外からの参加者が増えました (表1)。

表1 TSI 参加者数と出身国の推移

出身国	平成23年	平成24年	平成25年
台湾	15	8	15
韓国	5	10	14
インド	4	3	6
ASEAN	0	1	4
中国	1	1	2
オーストラリア	2	6	5
アメリカ	2	3	20
カナダ	0	0	5
ブラジル	4	5	4
イギリス	4	7	11
EU	2	1	1
日本	37	27	30
合計	76	72	117

海外からの学生と学部生の参加が増えたため、平成23年度からはプログラムを2つに分け、参加学生は、研究方法論の講義・演習“Graduate Research Seminar”か、あるいは、柔道、剣道、フラッグフット、身体技法、フィットネステスト、メンタルトレーニング等の心技体の実習・演習を中心とした“Sport, Physical Activity, and Culture in Japan” (SPAC) のいずれかを選択することになりました。2つのグループが共に参加するのは、長谷川悦示先生と渡邊仁先生のご協力で第1回 TSI から続けている UDON-making 等の social activity です。平成25年度からは、2つのグループのつながりを強め参加者の国際性を生かすために、2つのグループを越えた国別グループを編成して、プログラム期間中に他国の文化を学ぶ文化的な課題も導入されました。

平成23年度から、より独立したプログラムとして実施されるようになった SPAC は、松元剛先生をプログラムディレクターとして、体育センターの先生方の多大なご協力を得て行われています。平成25年度は三田部勇先生のご協力を得て、SPAC 受講生は市内の小中学校の体育授業や部活動を見学に行きました。グループに分かれて日々の活動とグループでのディスカッションをポートフォリオにまとめ、最終日にグループ発表を行います。発表や最終レポートの中で、海外の学生の多くが、技術や運動を学ぶだけでなくその精神性や文化を踏まえて学ぶ武道の考え方、嘉納治五郎の武道を通じての教育、児童生徒が熱心に活動している体育授業やフラッグフット等の教材を自国に持ちかえって活用したいと述べていました。彼らは帰国した後も、TSI についてのレポートを大学に提出したり、ニュース記事を大学の HP 等に投稿したり (e.g. University of Bedfordshire, 2012; University of Toronto, 2013)、TSI

の説明会を開いてくれ、受講生同士はSNSを通じてその後も交流を深めています。

平成25年度からは、体育センター開設科目として「日本の体育・スポーツ文化」が、体育学専攻開設科目として「つくばサマーインスティテュート」が開設され、平成26年度からは体育専門学群においても「つくばサマーインスティテュート」が開設され、TSIに参加した筑波大生が単位を取得できるようになりました。また、平成25年度からは、竹村雅裕先生、大森肇先生、征矢英昭先生にご尽力いただき、これまでの2つのプログラムに“Laboratory Workshop”が加わりました。アメリカ、インド、イギリス、ニュージーランド、ブラジルの学生が、運動生化学やバイオメカニクス、スポーツ医学の講義・演習・実験に参加しました。平成26年度には仲澤眞先生にご協力いただき、スポーツビジネスマネジメントのプログラムを加えた4つのプログラムをTSIで実施する予定です。

小さなきっかけで始めた筑波英検の補習やTSIを、筑波大学体育系の組織と先生方が発展させて下さいました。先生方を面倒なことに巻き込んでしまった張本人をSS評価していただいたことに、改めてお礼を申し上げます。ありがとうございます

た。



写真2 Tsukuba Summer Institute 2013

Occhino, Joe (2010) Tsukuba Summer Institute. http://www.siit.jp/japanese/wp-content/uploads/2011/03/Tsukuba_Report._PDF.pdf (2012.2.14)

University of Bedfordshire (2012) <http://www.beds.ac.uk/news/2012/december/international-summer-school-creates-global-citizens> (2014.2.14)

University of Toronto (2013) International immersion; Undergraduate expands perspective at Japanese University. Pursuit, Vol.16 (2), 9.